

イグサ畑苗床の被覆物による雑草防除および乾燥害防止

中原隆夫・森藤信治・住吉 強・*井上恵子 (福岡県農業総合試験場筑後分場・*福岡県農業総合試験場)

Takao NAKAHARA, Nobuharu MORIFUJI, Tsuyoshi SUMIYOSHI and Keiko INOUE : Weed Control and Drought Prevention by Mulching on Upland Nursery of Mat Rush

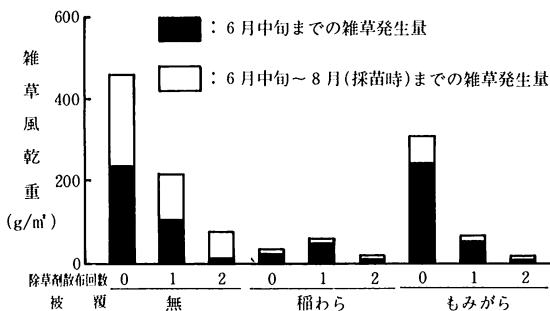
イグサの畑苗床ではメヒシバ、ヒエおよびイヌガラシなどの雑草防除のために、3月下旬と5月中旬に除草剤を散布している。しかし、雑草の発生が多い苗床では、除草剤による防除だけでは十分な効果がなく、苗の生育が劣るなどの雑草害を生じている。また、苗の生育が旺盛となる梅雨明けから8月にかけては、高温で雨が少ないため、苗床土壌が乾燥し、苗質が悪くなる傾向がみられ、健苗育成の上から大きな問題となっている。そこで、約5cmの長さに切った稲わらまたはもみがらで苗床面を被覆した場合の雑草抑制効果および乾燥害の防止効果について検討を行った。

1. 試験方法

1984年は品種あさなぎを用い、1区6㎡の2反復とし、3月3日に植付け、3月22日に被覆を行い、8月15日まで栽培した。1985年は品種いそなみを用い、1区3.5㎡の2反復とし、2月21日に植付け、4月1日に被覆を行い、8月2日まで栽培した。栽植密度は34.6株/㎡(17cm×17cm)とし、施肥量(kg/a)はN 2.3、P₂O₅ 0.5、K₂O 2.7とした。被覆については無被覆、稲わら150kg/a、もみがら150kg/aの3区とし、それぞれの区をさらに除草剤無散布区、除草剤1回散布区(3月22日にCAT水和剤10g/aとトリフルラリン乳剤30ml/aを混用して10/a散布)、除草剤2回散布区(1回散布区にさらに1984年は5月23日、1985年は5月18日にアロキシジム水溶液10g/aとアイオキシニル乳剤20ml/aを混用して10/a散布)に分けた。

2. 結果および考察

1) 雑草発生量 稲わら被覆の場合、慣行(無被覆、除草剤2回散布)よりも雑草発生量が少なく、除草剤無散布でも優れた雑草抑制効果が認められた(第1図)。



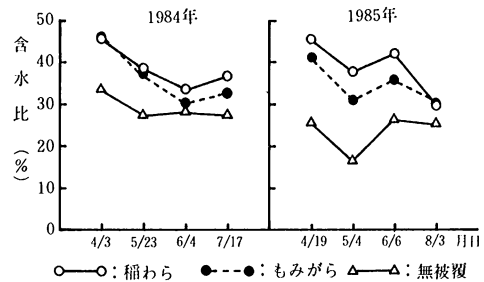
第1図 雑草発生量(1984, 1985年の平均)

一方、もみがら被覆による雑草抑制効果は稲わら被覆の場合より劣ったが、3月下旬の除草剤散布との組合せにより、十分な雑草抑制効果が得られた。

2) 畑苗床土壌の含水比 晴天が5日以上続いた時期の地表から5cmの深さの畑苗床土壌の含水比を第2図に示した。ほとんどの時期で、畑苗床土壌の含水比は無被覆<もみがら被覆<稲わら被覆の順で、稲わら被覆による乾燥防止の効果が高かった。

3) 畑苗の生育 8月の採苗時の生育を第1表に示した。1984年の稲わら被覆区はいずれも茎数が多く、生育は良好であった。また、1985年の稲わらおよびもみがら被覆区は茎数は慣行区並かやや少ない区もあるが、乾物重は慣行区と同程度かそれ以上であった。

以上の結果から、畑苗床を稲わら150kg/aで被覆することにより、雑草を抑制し、乾燥害を防止できるが、もみがらの効果はやや劣ることが明らかになった。



第2図 畑苗床土壌の含水比(0~5cm)

第1表 畑苗の生育

区	被覆	除草剤散布回数	1株茎数		1株地上部乾物重			
			1984年比	1985年比	1985年比	1985年比		
1	無	0	71本	73%	91本	66%	13.5g	65%
2	無	1	93	96	107	78	16.9	81
3(比)	無	2	97	100	137	100	20.9	100
4	稲わら	0	124	128	123	90	20.7	99
5	稲わら	1	124	128	138	101	25.0	120
6	稲わら	2	128	132	130	95	25.0	120
7	もみがら	0	97	100	124	91	22.5	108
8	もみがら	1	115	119	141	103	25.3	121
9	もみがら	2	117	121	135	99	23.8	114